

大阪市小学校教育研究会視聴覚部報告⑳

3年 タブレット端末を活用した体育学習 — 跳び箱運動における動画を 効果的に使った指導法を検証する —

大阪市立住之江小学校教諭 武田 芳彦

■はじめに

本実践では体育科におけるタブレット端末の活用について取り組んだ。これまでに体育科においてタブレット端末を活用した例は多くあるが、その有用性についての検証がなされている実践は数少ないのではないだろうか。

そこで、本実践では体育科の中でも器械運動領域に焦点をあててタブレット端末の有効活用について考えた。

器械運動は動きのコツを細分化して捉えやすく、また、動きの美しさを追求できる学習である。流動的な動きや部分的な動き、または思考と判断と表現のつながりなど、どの領域にもっともICTが効果を発揮するのかを検証してみたい。

■実践の内容

○第3学年 体育科

○学習内容

「台上前転・大きな台上前転」

○単元目標

- ・跳び箱運動の楽しさや喜びに触れ、基本的な支持跳び感し技ができるようにする。
- ・跳び箱運動に進んで取り組み、きまりを守り、互いに仲良く励まし合って運動したり、器械・器具の安全に気を付けたりすることができるようにする。
- ・自己の能力に適した課題をもち、技ができるようになるための活動を工夫することができるようにする。

■教材観・指導観

本単元では、ICTを活用した台上前転のより効果的な指導法を追及することをねらいとした。

活用の方法として、(1)全体指導の場でプロジェ

クターを使用して、手本となる動画を撮影し、技のポイントの指導や解説を行うこと。(2)グループごとにタブレット端末で各自の運動の様子を撮影・視聴することの二つに焦点化した。

運動の様子を動画で視聴することで、(1)では技のポイントや動き方を視覚的に理解することができ、(2)では自分や仲間の運動の様子を視覚的に捉えることで、客観的な自己分析や仲間へのアドバイスができるようになったからである。

また、ただ漠然と視聴することにならないよう、技のポイントを、

- ①手の着き方
- ②踏み切りと腰の位置
- ③頭の着き方と回り方
- ④着地

の4つに分けて運動を分析する観点を明確にし、課題の設定や解決につなげた。

跳び箱の高さといった記録だけではなく、運動の美しさを追求させるために、ICTの活用が効果的に活用できると考えた。

■指導計画 (全9時間)

- 第1次 学習のねらいや進め方を知り、単元全体の見通しをもつ (1時間)
- 第2次 台上前転のポイントや練習の仕方を知り、練習に取り組む (1時間)
- 第3次 台上前転の動きを視聴し、課題をつかむ (1時間)
- 第4次 台上前転・大きな台上前転に取り組む (4時間)
- 第5次 発表会の準備をする (1時間)
- 第6次 学習の成果を発表する (1時間)

■授業の展開 (第4次)



写真1・感覚づくりの運動の様子

1時間の学習活動の流れは、感覚づくりの運動、学習課題や学習の進め方の確認、練習タイム、ポイントチェックタイム、話し合いタイムとして構成した。

感覚づくりの運動では、台上前転の技能につなげるため、高さ感覚、腕支持感覚、逆さ感覚、回転感覚、平衡感覚、リズム感覚の練習コースをつくり、基礎的な運動や感覚づくりを行った (写真1)。

練習タイムでは、手本の動画をプロジェクターで投射し、コマ送りや一時停止をするなどして技のポイントを解説したり、運動のコツを指導したりした。子どもたちは自分の課題に合ったコースを選んで練習に取り組んだ (写真2)。

ポイントチェックタイムでは、撮影する位置を横からとし、うまく撮影できるようにタブレット端末を机に固定した。また、動きをじっくりと観察できるよう、スローモーションで撮影した。児童は、コマ送りしたり一時停止したりして自分たちの動きを確認し、熱心に話し合いを進めたり、学習カードに自己評価を書いたりしていた (写真3)。

■指導を終えて

感覚づくりの運動、練習タイムではミュージックタイマーを使用したことで、楽しみながら感覚を養わせたり、主体的に練習させたりすることができた。

ポイントチェックタイムでのタブレット端末の活用は、台上前転の技のポイントを4つに分けて指導したことで視聴や話し合いの際の観点が明確

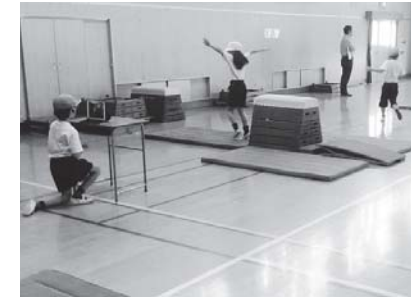


写真2・練習タイムの様子



写真3・動画の視聴や話し合いの様子

になり、児童に自分の課題を認識させることができた。動きのコツを考えたり、仲間との学び合いが深まったりするなど大きな効果が表れた。

また、撮影された動画は児童が課題認識や自己評価に使用するだけでなく、指導者の児童に対する評価に使用することも大きな利点である。学習中の動きだけでなく、撮影された動画を見ることが確かな評価につながった。

課題としては、基礎体力が身につけていない児童や運動の苦手な児童への支援方法である。これらの子どもたちはタブレット端末を使用して課題を見つけたり自己評価につなげたりすることが難しく、指導者が補助をしながら指導する方が効果的であった。

また、本実践では、体育器具だけでなく、多くの視聴覚機材が必要であったため、授業の準備に大きな労力や時間を費やした。どの学年でも簡便にICTを活用した授業ができるよう、体育館での学習環境をどのように整備していくのかを検討していく必要がある。